
シンポジウム 6

泌尿器科がんゲノム医療の最前線

座 長 杉 元 幹 史 (香川大学医学部 泌尿器・副腎・腎移植外科)
神 波 大 己 (熊本大学大学院生命化学研究部 泌尿器科学講座)

司会のことば

前回愛媛での西日本泌尿器科学会でも「ゲノム医療の坂と雲 ～個別化医療へむけた挑戦～」というテーマで、ゲノム医療自体が坂をどれくらい登っていて、雲まで到達するまでに解決すべき課題について勉強しましたが、今回の「泌尿器科がんゲノム医療の最前線」では、泌尿器科領域での「がんゲノム医療」の最前線はどこにあるのか、また泌尿器3大癌における「がんゲノム医療」の現状と展望について5名のシンポジストからお話をいただきました。

まず基調講演として、加藤大悟先生（大阪大学泌尿器科）からは「泌尿器癌におけるリキッドバイオプシーによる ctDNA 解析の最新情報と、MONSTAR-SCREEN における泌尿器癌の解析進捗状況」について、また前嶋愛子先生（国立がん研究センター中央病院腫瘍内科 / 泌尿器・後腹膜腫瘍科）からは「泌尿器癌と他癌腫の現状から見た CGP 検査運用の理想と現実」について腫瘍内科の観点でお話しいただきました。

次に各論として、腎癌、尿路上皮癌、前立腺癌それぞれの癌腫別に、「ゲノム医療の現状と将来展望」を語っ

ていただきました。穴見俊樹先生（熊本大学泌尿器科）からは、腎癌における VHL をはじめとする遺伝子変異解析研究の現状と腎癌で多く見られる機能喪失型遺伝子変異の治療標的としての難しさという課題が提示されました。鑑野秀一先生（鹿児島大学泌尿器科）は、ゲノム解析研究から Nectin-4, FGFR3, HER2 など新たな治療標的の開発が進む尿路上皮癌の現状と課題をお話しされました。最後に、土肥洋一郎先生（香川大学泌尿器科）は、BRCA 変異を中心として一足はやく「癌ゲノム医療」を臨床実装した前立腺癌の経験から、マルチコンパニオン診断への期待が語られました。

西日本泌尿器科学会総会は、次の世代の中堅から若手が自己アピールをして売り出す格好の舞台ですが、各シンポジストが期待通りの「とんがったパフォーマンス」を発揮され、聴講された先生がたにも大変勉強になる、メッセージ性のあるものであったと自負するとともに、泌尿器科の明るい将来が見えたセッションでした。

泌尿器科がん領域では、ゲノム医療はまだまだ始まったばかりです。本シンポジウムにより、ゲノム医療についての認識を深めていただければ幸いです。